

(公社)日本鍼灸師会 全国大会 in 愛知大会レポート

講演3: 身体観察・鑑別診断

講 師: 松久貴晴先生(松久医院副院長 名古屋大学附属病院総合診療科客員研究員)

報告者: 奥田一道(研修委員会)

今回の講義を聴講し、タイトルである「身体観察・鑑別診断」のため、適切なマナーに則ったコミュニケーションの重要性を再認識させられた。

総合診療医は疾患に対して生物・心理・社会面から適切に対応することが求められる。

そういった意味で総合診療医と鍼灸師は親和性の高いものと講師の松久先生は考えておられる。われわれ鍼灸師も東洋医学的な診察として全身のバランスを考えながら望診・聞診・問診・切診の四診を行う。一方で西洋医学的な身体診察として、医療面接から始まり、視診・聴診・打診・触診と神経学的所見をとり、まずは鍼灸の適応不適応の鑑別を行うが、今回は感度、特異度の概念について取り上げ、われわれ鍼灸師も日常臨床で気を付けなくてはならない所見についてご紹介いただいた。

いずれにしても、所見の収集のためには患者とのコミュニケーションが十分に取れるか、という事が重要になってくる。

講演の中では、名古屋大学総合診療科元教授 伴信太郎氏のビデオを中心に西洋医学の診察方法が紹介された。

個人的に印象に残っていることは手を温めるという基本的なことだ。どんな診察に際しても医師も鍼灸師と同様に「手」を使う。伴氏はビデオの中で、『利き手は「感じること」に専念する』と述べておられる。

医師よりも情報収集のために触れる作業の多い鍼灸師にとって、手の重要性は非常に高いものとなるはずである。

まず目の前の患者さんを包括的にとらえ、触れ、診る一連の情報収集は同時に「手当て」という治療行為でもある。

われわれ鍼灸師にとって「触れて診る」というベーシックな部分に立ち返り、その重要性を今一度考えさせられる、本大会のテーマである「人を診る」にふさわしい貴重な講演であった。